

下大賀遺跡（しもおおがいせき）

所在地：那珂市瓜連1,570-4番地ほか

調査期間：平成29年4月1日～平成30年3月31日

調査面積：10,155 m²

委託者：茨城県常陸大宮土木事務所

調査原因：一般国道118号道路改築事業

調査機関：公益財団法人茨城県教育財団（那珂事務所）

TEL：029-225-6587

<http://www.ibaraki-maibun.org>

1. 遺跡の立地

当遺跡は、那珂市の北部、久慈川の支流である玉川右岸の標高42mの台地上に位置し、その範囲は、東西2.3km、南北1.0kmと広大です。縄文時代から近世までの複合遺跡です。当地は、『新編常陸国誌』によれば、平安時代には久慈郡倭文郷くじくむりしりこうに属するとされています。

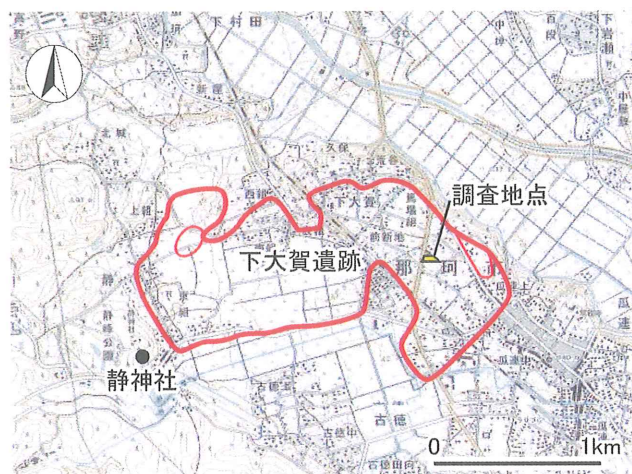
2. 調査の概要

調査は今回で第6次となります。今回の調査で、竪穴住居跡11棟、土坑約120基、道路跡1条、溝跡5条などを確認しました。主な遺物は、平安時代の竪穴住居跡から、土師器と須恵器の甕や坏、鎌倉時代から江戸時代にかけて機能していたと考えられる道路跡から、古瀬戸の花瓶や瓶子、常滑の甕や片口鉢などの陶器類、磁器では青磁の碗が出土しています。

3. 調査の成果

平安時代には、第1～5次調査成果と同様に集落が営まれていました。第182号竪穴住居跡からは、灰釉陶器の壺が出土しており、それを手に入れることができた有力者の存在がうかがえます。

鎌倉時代以降では、調査区を東西に縦断する道路跡が確認できたことが特筆されます。道路跡は、台地を切通し状に掘り込んでいます。道路跡の硬化面を確認したところ、少なくとも3次面あると推定されます。道路跡の両側には側溝が掘られており、道幅は側溝を含めて約5～6mです。道路跡からは、陶器類（古瀬戸・常滑）や磁器（青磁）などが多数出土しています。出土遺物から、鎌倉時代から江戸時代まで利用された道路と考えられます。さらに、「波板状凹凸面なみいたしようおうとつめん」という道路構築時の工法も確認できました。瓜連は中世において、交通の要所であり、この道路跡は、文献による常陸と奥州を結ぶ南北朝の「依上道よりかみどう」、また江戸時代の「南郷道なんごうみち」である可能性があります。



下大賀遺跡の位置図

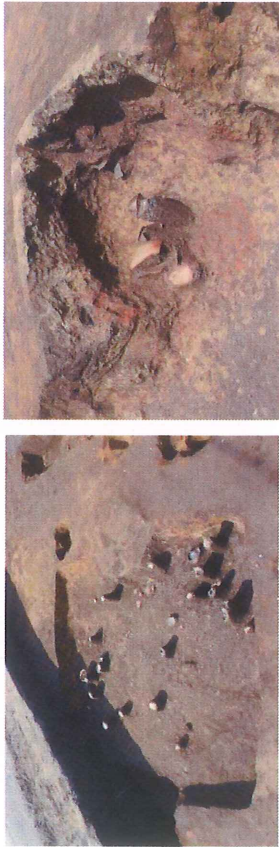


第3号道路跡完掘状況（西側から）



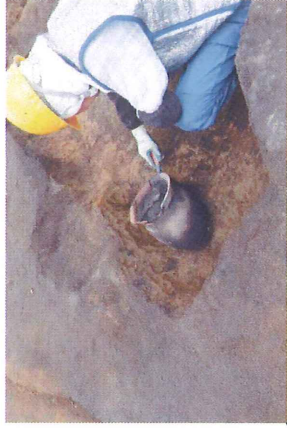
次回の現地説明会は9月10日（日）につくば市島名本田遺跡で開催予定です。ぜひ見に来てネ！

第182号竖穴住居跡遺物出土状況（平安時代）



上層から「東」と墨書された土師器の坏，覆土中層からは灰釉陶器，床面からは土師器の甕や内面黒色処理が施された坏が出土しました。竈は東側にあり，土製の支脚が使われた状態で残っていました。

第184号竖穴建物跡遺物出土状況（平安時代）

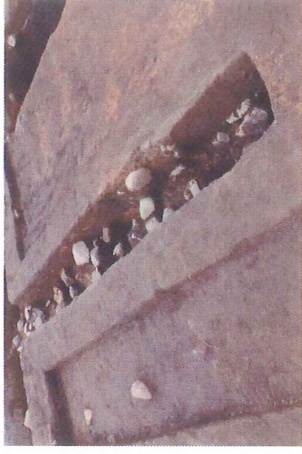


土師器の甕がほぼ完形で出土しました。

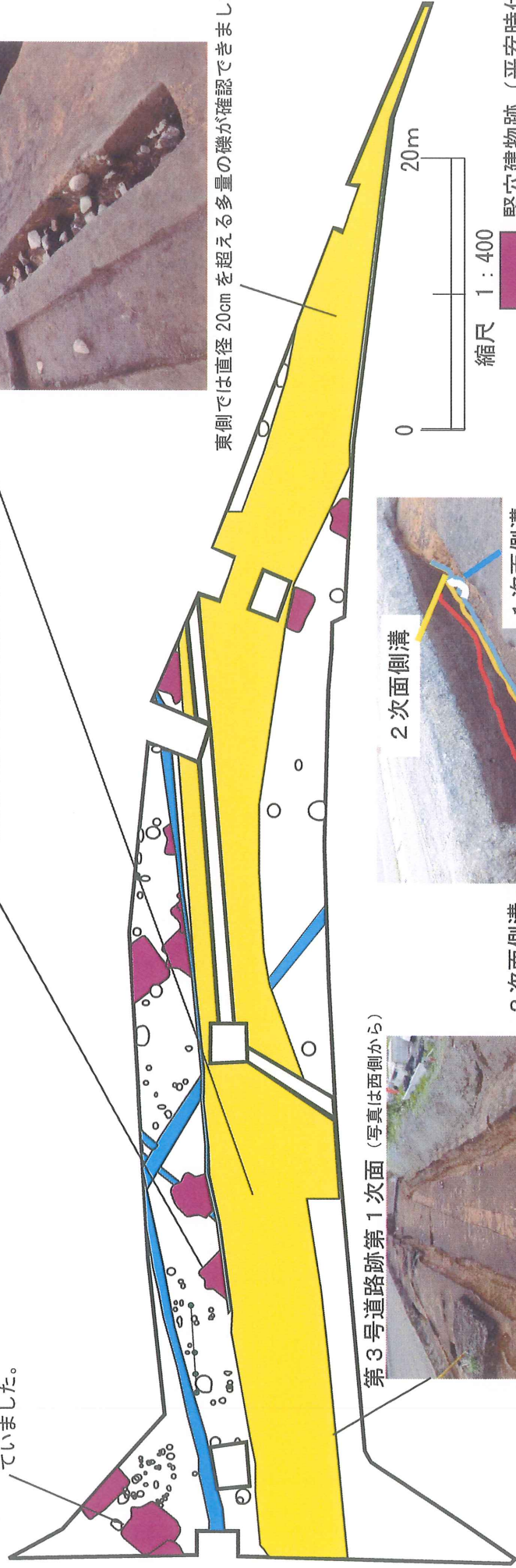
第3号道路跡波板状凹凸面（上：西側，下：東側）



波板状凹凸面は，西側では小さな穴が連続しており，礫が入れられているところもあります。



東側では直径20cmを超える多量の礫が確認できました。



縮尺 1:400

■ 竖穴建物跡（平安時代）

■ 道路跡

■ 溝跡

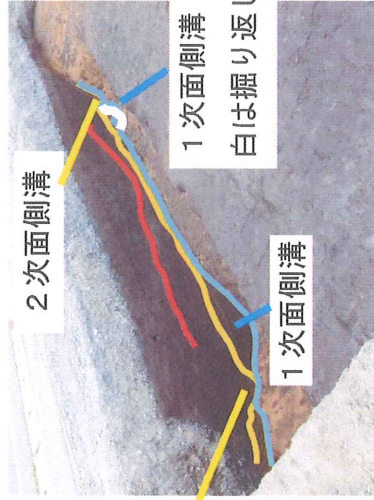
■ 土坑

■ 柱穴列

第3号道路跡第1次面（写真は西側から）



2次面側溝



2次面側溝

1次面側溝
白は掘り返し

1次面側溝

調査区を東西に縦断しています。硬化面を少なくとも3面確認しました。

第3次面が一番新しく，道路幅が約2.6mでした。黒色土によって構築されています。

第2次面は，両側に側溝を持ち，幅が約5mです。側溝は浅く，路面は全体的に硬化をしています。

第1次面は，両側に側溝を持ち，幅が約6mです。側溝は深く，何度も掘り返されています。

第3次面

第2次面

第1次面

この資料は，調査中の情報であり，最終的な結果ではありません。資料の引用・掲載をご遠慮願います。